

世界の脱石炭化と日本の石炭依存

【COP25の開催】

2019年12月に、スペインのマドリードでCOP25(気候変動枠組条約第25回締約国会議)が開催されました。今回は、そのCOP25で話題になったことを振り返ってみたいと思います。

【世界各国の“脱石炭化”と日本の石炭依存】

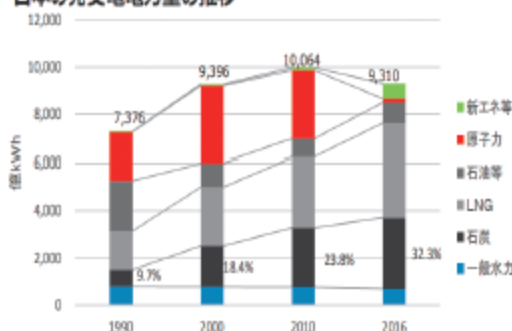
近年、EU諸国やオーストラリア、カナダなどをはじめとした世界各国が、石炭火力発電から脱却することを続々と表明しました。石炭火力発電はいくら高効率化しても天然ガスによる火力発電と比べ、二酸化炭素を2倍ほど排出してしまいます。それにより、パリ協定に基づいて各国で定められた二酸化炭素の排出量目標を達成できなくなるためです。

一方、日本国内では現在も石炭火力発電所が増加しており、今後も30基前後新設される計画となっています。(1990年からの石炭火力発電量の変遷は右図1参照。)

また、日本は石炭火力発電の海外輸出も進めており、脱石炭化に逆行する日本の政策に対し世界各国から批判が集まっています。



日本の発電電力量の推移



出典：経済産業省「エネルギー白書2018」及び「平成29年度電力需給速報」より作成

図1 1990年以降の国内の発電量推移

【石炭から脱却できない日本の状況】

COP25の閣僚級会談において、日本の小泉進次郎環境相は「石炭火力発電所の新設や輸出に対する認識に、日本と世界との間で大きなギャップがある」と話しました。日本の石炭依存政策が世界から批判されていることはわかっているのにこの状況から脱却できないのには、いくつかの理由があります。

1つ目は、島国である日本は全ての電力を国内で賄わなければいけないため、技術的に安定した安全な電源を必要とするためです。ヨーロッパ諸国など、他国と地続きになっている国では電力の輸出入が容易なため、全ての電力を自国で発電する必要はありません。一方、日本は島国であるため、国内で全ての電力を賄う必要があり、安価に調達できて発電量の調整も容易な石炭火力発電が重要視されているのです。

(裏面へつづく)

2つ目は、二酸化炭素削減を進めたい環境省と、発電インフラの輸出などを進めたい経済産業省で意見が対立していることが挙げられます。日本は国策として国内の石炭火力発電新設を進めるだけでなく、石炭火力発電所を海外に輸出しています。これをすぐにやめて脱炭素化を進めることは経済界からの反発もあり、なかなか進んでいないのが現状です。



【まとめ】

ここまでは、COP25で各国から批判的となった日本の石炭依存の状況を書きました。安定した電源確保は私たちの生活のためにもとても大事なことです。しかし、今や世界のトレンドは脱炭素化です。小泉進次郎環境相は今年1月の会見で「石炭発電にクリーンはない。」と断言し、石炭火力発電の使用や輸出について経済産業省などと議論していく姿勢を表しました。次回のCOP26は今年の11月にイギリスのグラスゴーで開催される予定です。それまでに環境省が経済産業省と議論を進め、どこまで動かすことができるか、小泉環境相の手腕にかかっていると言っても過言ではありません。

また、その議論を踏まえ、COP26の場で日本がどのような意志表明をするのか、当協議会では継続して注目していきたいと考えています。

【参考URL】

国立研究開発法人 国立環境研究所
COP25の概要と残された課題

https://www.nies.go.jp/social/topics_cop25.htm



編集者の独り言

【彗星の如く現れたグレタ・トゥーンベリ】

今、環境活動家として世界中の視線を一身に集め話題になっているのは、やはりスウェーデン出身のグレタ・トゥーンベリさんでしょう。彼女は昨年9月にニューヨークの国連本部で開催された国連気候行動サミットの中で痛烈な言葉で演説を行い、日本でもニュースなどで大きく取り上げられました。彼女の演説がここまで話題になっているのは、この世界の既得権益層（＝大人）に対する批判に満ち、多くの若者の共感を得ているからです。彼女の言葉はただ痛烈なだけでなく、科学的な裏付けがあるため、大人からの支持も多く集めると同時に、多くの批判も呼んでいます。

彼女のメッセージをこの紙面に書ききることはできませんし、内容についても賛否両論があると思います。しかし、是非一度皆さんにも彼女のことを知っていただきたい。そしてご自身が何をどう感じたか振り返っていただきたい。

歴史は繰り返す、という言葉があります。私は彼女の姿に15世紀フランスのジャンヌ・ダルクを重ね合わせずにいられません。イングランドに占領されつつあり、閉塞的な空気に満ちていた当時のフランス。その中でジャンヌが軍を率いてイングランドと戦い劇的な勝利をもたらしつつあった頃、彼女の年齢は17歳。奇しくも現在のグレタさんと同じ年齢の時のことでした。



【参考URL】

東京新聞

グレタ・トゥーンベリさん演説全文 「すべての未来世代の目はあなたたちに注がれている」

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/world/list/201909/CK2019092502100025.html>

視察研修報告

私たちひらいずみ地球温暖化対策協議会では会員たちの資質向上と知見を広げる目的で、毎年視察研修を行っています。今年度は照井土地改良区さんが取り組んでいる小水力発電について学び、照井堰を見学してきました。

①照井土地改良区（講話）

照井土地改良区さんに『小水力発電事業の取り組み』等についてご講話をいただきました。照井土地改良区さんは現在3つの水力発電所を設置し、年間約232tも二酸化炭素排出を削減されています。近年では、日本初の“国産製のプロペラ”を設置した「八幡沢発電所」が稼働し始め、また、全国に4,000近くある土地改良区へ、自らの活動を事例として水力発電の設置を推進する等、水力発電の設置推進活動に精力的に取り組まれています。



おおしめきりとうしゅう

②大メ切頭首工・照井堰見学

大メ切頭首工とは「照井堰の始まり」、いわゆる取水口です。見学時には大量の水が流れる光景に圧倒されました。

頭首工見学の後は、水の流れを追って照井堰を見学しました。少量の水を有効活用するという姿勢は、小水力発電に通ずるものを感じました。

③樋の沢隧道体験

昔の方々が掘った水の通り道、「樋の沢隧道」の中の歩行体験をしてきました。

高さがわずか120cmしかないため、参加者は全員腰をかがめ、苦勞して歩ききりました。

この隧道内には野生のコウモリ等が生息しており、水を通すだけでなく自然環境保護にも役立っていました。

この隧道を現在も使うことができているのは、地域の人が定期的に清掃活動をするなどして大切にされているからです。



まとめ

照井土地改良区さんで古い施設が大事にされている現場や小水力発電所を見学したことで、大きなことではなくても、『一人ひとりが出来ること』を考えるきっかけとなり、また、再生可能エネルギーを活かすチャンスは身近にあるのだということを再発見できました。



日本の再生可能エネルギー、今どうなってる？



◎みなさんは知っていますか…？

屋根に太陽光パネルが乗っている家はもう珍しくありませんね。

他にもいろいろな再生可能エネルギー発電がありますが、現在日本ではどれくらい利用されているのでしょうか。



◎実は世界第5位の発電量

今回の特集では石炭火力発電にスポットを当てましたが、実は日本も再生可能エネルギー発電が急速に増加しています。割合としてはまだ少ないのですが、再生可能エネルギー発電の総量は、実は世界第5位なんです！

◎日本の上はどこ国？

日本の上には4つの国があります。1位から4位まで、中国、アメリカ、ドイツ、インドという順番です。日本でももっと再生可能エネルギーが浸透するといいですね！



環境講演会

- 内 容 「一関市地球温暖化対策地域協議会の活動と温暖化について」
- 講 師 佐々木 勝裕氏 一関市地球温暖化対策地域協議会事務局長
環境省 環境カウンセラー（市民部門）
岩手県地球温暖化防止活動推進委員
- 日 時 令和2年3月23日（月） 18時30分～20時00分
- 会 場 平泉町役場 2階 201会議室
- 参加費 無料

地球温暖化対策に取り組む会員募集中!!

ひらいずみ地球温暖化対策協議会（略称：エコネット平泉）に入会して、温暖化対策と一緒に取り組みませんか。協議会の目的に賛同する個人・事業者・団体で地球温暖化対策に関心のある方、これから取り組みを実践してみたい方ならどなたでも入会できます。

■年会費■ 個人会員 500円 事業者・団体会員 1,000円

入会を希望する方は、お気軽に協議会事務局にお問い合わせください。

ひらいずみ地球温暖化対策協議会（エコネット平泉）

事務局 平泉町民福祉課内

TEL：0191-46-5562 / FAX：0191-46-3080

